

文章・文体

金岡孝

昭和五五、五六年の刊記のある(一)、二例外をふくむ)、文章・文体に関する著書一六、論文約七〇編を取上げ、次の四項目に分けて記述する。

- (一) 文章・文体の原理的、体系的的研究
- (二) 文章・文体の通史的的研究
- (三) 類型別の文章・文体の研究
- (四) 作品・作家別の文章・文体の研究

分類は便宜的にならざるを得ない。また二項目以上にまたがるものもある。しかし各著書・論文の一往の位置付けにはなり得ると思う。

一、文章・文体の原理的、体系的的研究

ここでは文法論的な文章研究(文章論)・文体論・文章心理学・表現論に関する研究を取上げ、それらに関する歴史的考察とみなされるものを加え、文章作法書にふれる。

文法論的な文章研究では、長田久男氏『国語連文論(上)・(下)』(私家版、昭56・6)がある。連文を対象として、その中に存在の仮定される連文法則を見出し、その法則に基づいて連文の成立を説

明する体系を論述したもので、連文教育の実践に支えられた研究の集成である。同氏には文章の成立、統一、構造、構成を考察した『国語文章論仮説』(私家版、昭56・12)もある。連文の問題を扱ったものでは、野村真木夫氏「連文論のための方法試論——現代日本語感覚文を視座として——」(北海道大学『国語国文研究』昭55・2)は、連文域(任意の一文の近傍の文連結体)の中での感覚文(悲シイ、ホシイ、残念などの用言によって構成される文)の位置付けを問題にしている。また林四郎氏「文章論と修辞学」(『筑波大学芸・言語学系紀要』昭55・3発行)は、漢文修辞学という、頂針回帰、および字眼と伏筆を取上げ、それらが、文章中の各文がもつ承前性・始発性・転換性のシステムの問題にもつながることを指摘している。文章論、特に連文の問題に関する論である。ほかに、「ことば」の単位体としての文章と「言語」の単位体としての文の区別を論じた、梅原恭則氏「ことばの単位体——文章と文について——」(東洋大学文学部『文学論叢』55)がある。

文体論では、中村明氏「文体の標準とは何か(上)・(下)」(『文学』昭56・9、10)は、文体の標準を設定すべき条件として、(一)使用言語の性格、(二)書き手の属性、(三)ジャンルの特性、(四)諸ジャン

ルのうち、小説に限定した場合の) 小説の種類・流派・作家の文体、個人人の広がりを考え、氏自身のをふくめて諸家の研究・調査をふまねながら、以上の諸条件を検討した結果、文体の標準は、条件の細分化と文章の要素(文章の形態的特徴のあらわれる部面、たとえば、発想、作品構成、視点の構造、文章展開、修辭、用字、用語など)の整備・充実が進むにつれて、各レベルでの輪郭を次第に濃くしていくであろうと結んでいる。およそ文体を決定する条件として想定されるものの、ほとんどといってよいものを取上げて仔細に検討したもので、論文のテーマとは別に、文体研究の手引きとしても役立つ論文である。なお同氏の「文体としての視点」(『言語生活』昭56・6)は、文章表現の視点を、叙述視点とそれを支配する創作視点とに区別、創作視点の個性が文体として姿を表わすことを実例によって説いたもので、右の論文の一部にもつながるものである。

文章心理学に関するものでは、波多野完治氏に新著『説得の文章心理学——マスメディア時代のレトリック——』(筑摩書房、56・5)がある。

「レトリックは言語の本質的なはたらきであり、それなしでは、人間の言語活動が不可能になってしまうような、そういう作用なのである」という、昔の死滅したレトリックとは区別される「新しいレトリック」観に立って、コミュニケーションと説得の問題を論じている。また相関論から発展し、心理学の分野で発達した因子分析法を扱った、安本美典・本多正久両氏の共著『因子分析法』(培風館、昭56・9)は、かつて『数理科学』に連載した、文科系のための因子分析法入門を基にして、加筆、整理したもので、因子分析法の歴史、応用例、因子分析法による現代作家の分類などを扱っていて、文章心理学や文体論の研究に役立てることができる。

表現論の分野では江湖山恒明氏の新著『国語表現論の構想』(明治書院、昭56・5)がある。昭和三〇年の旧著『国語表現論——文章作の表現研究』で示された基本問題を補強する意図で書かれたものである。氏の国語表現論は対象をはっきりと文章作品に限定しているが、文章作品とその用語に関する理論に基づいて、和歌の表現の特色と万葉集の表現上の問題を論じている。なお表現学会が名古屋での例会が一〇〇回をこえた(この間一五年)のを記念して、今井文男氏編『表現学論叢』(中部日本教育文化会、昭55・7)を刊行、論文二五編を収めている。この中で本項に関するものでは、表現主体と表現対象との距離の問題を、蕪村の句を例として考察した、今井文男氏「表現における距離とその生成過程」が見られる。

次に、甲斐睦朗氏「文章論成立史の試み——時代誌記者『全研究序説』を中心に——」(『表現学論叢』)は、時枝誠記の文章論のもつ意義と問題を、特に『文章研究序説』を中心に、文章の研究史的観点から考察したもので、時枝文章論を欧米から移入された修辭学や、それに従った作文法、および解釈学などと比較して、その相違点を指摘するとともに、中にはそれらの見方に通ずるものが見出されると解している。また工藤進思郎氏「藤井高尚の文章論——『文のしるべ』と『伊勢物語新釈』を中心として——」(『表現研究』昭56・3)は「文のしるべ」で重視されている文章の通達性や中古体規範説が「伊勢物語新釈」の校訂態度にも反映していることと、この書が中古文を読み習うための指南書として作られたものであることを指摘する。以上二編は文章論、文章観の歴史的考察とみなすことができると思う。文章作法書には、大石初太郎氏著『文章批評』(筑摩書房、昭55・12)がある。新聞・雑誌などの文章を素材として、文章上の欠陥を

具体的に指摘し、その改善法を示すとともに、さまざまなタイプの名文をあげて、名文の条件を説いている。なお、中村明氏「文章作法書の展望」(『言語生活』昭55・11)は、明治以降の文章読本と称する本をはじめとする数種の文章作法書を紹介して、この種の本に対する期待を述べている。

二、文章・文体の通史的研究

文章・文体の歴史的研究の多くは、類型的な文章・文体を対象とした研究と、作品・作家を対象とした個別的な研究である。それらは次項以下で取上げることとして、ここでは通史的な研究とみなすことのできる著書を取上げる。

渡辺実氏『平安朝文章史』(東京大学出版会、昭56・7)は、竹取物語から大鏡に至る一二の仮名文学作品の文章を分析して、平安朝文章の創造、成熟、終結という歴史の流れを構成、記述したもので、広く諸家の説を取捨しつつ、多年にわたる氏の研究を集成している。具体的な言語の行為は作者により作品によって異なる、という観点の故に、分析の方法は、ほとんど作品ごとに異なるといつてよいくらいに多角的である。次に文字研究の立場から文章史にも関連するものに、築島裕氏著『日本語の世界5 仮名』(中央公論社、昭55・12)がある。主として現存する資料・文献によって、文字使用の起源と発達を跡づけながら、平仮名文・漢字片仮名交り文・片仮名専用文の成立と発達を記述したものである。なお、野口武彦氏著『日本語の世界13 小説の日本語』(同、昭55・12)、杉本秀太郎氏著『日本語の世界14 散文の日本語』(同、昭56・2)にも、文学研究の立場からではあるが、文章史的、文体史的記述がふくまれている。

三、類型別の文章・文体の研究

はじめに、これからの文章・文体の研究に貢献すると思われる資料的研究として、築島裕・小林芳規両氏共編による『中山法華三教指帰注釋索引及び研究』(武蔵野書院、昭55・2)を取上げる。中山法華経寺に伝存する三教指帰注は院政末期、遅くとも鎌倉初期を降らない時期の書写で、その本文を影印・翻刻したものに、その用語と漢字の総索引を加え、さらに研究論文六編を添えたものである。なお片仮名交り文の研究に多くの新資料を提供するものである。なお片仮名交り文の資料的研究には、小林芳規氏に、「高山寺経蔵の鎌倉時代の典籍について」(『高山寺典籍文書の研究』昭55・12)、「石山寺蔵の片仮名交り文の諸資料について」(『鎌倉時代語研究』昭56・5)がある。

平安時代の物語文の研究では、草子地をめぐる論が目につく。榎木正純氏「源氏物語草子地試論」(『武庫川国文』17)は、源氏物語の草子地に見られる、語り手と作中人物の時間的・空間的・心理的距離を、草子地の各文末語の使用度数を手がかりにして論じている。草子地論は語りの論とも表裏するが、栗原裕氏「八かたりVを読む」(『表現研究』昭56・9)は、語りの系列の中で物語音読論をとらえた上で、源氏物語の草子地を検討、玉上琢弥氏の物語音読論に修正を加え、さらに草子地が段階的、重層的に生成していくことを論じている。同じく語りとの関連では、中世になるが、安田章氏「語りの表現機構——中世の場合——」(『表現研究』昭56・9)は、天草本平家物語に語りの形式「……タト申ス」、「……タトキコエタ」の認められること、また一条兼良の「中書王物語」にも同様の表現

の認められることを指摘している。石田穰二氏「物語の大尾の形式について」（『東洋大学文学部『文学論叢』54）は、「とぞ本に」という形を基本とする物語の結びの形式は、作者の自記にかかるとあることを確認し、それが物語だけではなく日記随筆などの大尾にも広がるといふ考えを、源氏・蜻蛉などについて諸本の検討を経つつ述べている。また古注釈に見られる草子地の概念を検討したものに、柏原司郎氏「『地の文』と『会話文』とは対語か」（北海道教育大学『語学文学』18）、井爪康之氏「古注における『草子地』概念の拡散現象——注釈者の態度及び注釈書形成の方法とのかわり——」（広島文教女子大学『文教国文学』8）がある。なお、清水好子氏の新著『源氏物語の文体と方法』（後述）には未発表論文「草子地からの考察」が加えられている。草子地は視覚的な場面を巻々の頂点として成り立つ源氏物語にもっともふさわしい表現の方法であったとする。なお、池田和臣氏「語りや草子地は作品形成にいかにかかわるか」（『国文学、解釈と教材の研究』昭55・5）も草子地論からする源氏研究の一例である。物語文の研究では、ほかに、神谷かをる氏「物語文章と指示語」（大阪大学文学部『語文』39）がある。指示語の使用度数が、竹取・伊勢・大和・平中などの地の文は、コソソソカ（順）（落窪・源氏は、コソソソカソソの順）であり、それは歌物語・作り物語の会話文と同じ傾向を示しているという。

次に、平安時代の和歌・和文・漢文訓読文の三種に用いられている、受身と使役の助動詞の使用量を調査したものに、大坪併治氏「平安時代における受身と使役の助動詞の文体論的研究」（『国語学』120）がある。和歌では受身が使役より多く、和文では受身と使役が相半ばし、漢文訓読文では使役が受身より多いという事実を指摘し、

このような事実の原因を考察している。なおこの論文に導かれた、山下裕美氏『今昔物語』における受身と使役の助動詞の文体論的研究」（『大谷女子大国文』昭56・3）は、天竺篇・震旦篇と本朝篇前半と本朝篇後半の三部について同様の調査を行ったものである。

説話文学の文章を扱った、高橋敬一氏「説話文学の文章——助動詞の相互承接よりみたる性格——」（『福岡女子短大紀要』昭55・12）は、助動詞の相互承接における漢文訓読文と和文との対立を手がかりに、助動詞二種の相互承接の種類とその使用度数を、説話文学作品六と和文作品七について調査して、相互に共通するもの五〇種類、和文作品だけのもの一五種類、説話文学作品だけのもの八種類という結果を得ている。

明治期の文章を扱ったものでは、漢字語に付された振仮名を手がかりに口語文の成立時期を考察した、丹治芳男氏「口語文の成立時期について——明治時代の新聞を資料として——」（『中央大国文』昭56・3）、小学校の教科書を資料にして明治普通文の性格を考察した、岡本勲氏の「明治期の教科書の文体——小学校地理について——」（『中京大学文学部紀要』昭55・7）と「明治文語の助動詞の位相」（同、昭55・11）とがある。岡本氏のはともに、教科書の文章に常用される助動詞の用法を検討して、その文体が次第に簡略化、単線化の傾向を強めていくことを論じたものである。また、いわゆる欧文脈に関するものに、木坂基氏「近代文章史における欧文脈の問題——自然獲得の中の欧文脈——」（『表現研究』昭55・8）、畠中康男氏「近代文章史における欧文脈の一考察」（同）がある。

次に、比喩に関する論が若干目につく。次項に入れるべきものもここでふれることにする。比喩の原理的研究である、三宅雅明氏

「字義とメタファーとのあいだ——言語表現論に求めるもの——」（『表現研究』昭55・9）は、メタファー（比喩語）と字義との対比を通じてメタファーの検討をすべきだとし、メタファーの理論が言語表現論の内部にとりこまれなければならないとする。同氏には比喩表現論を樹立するための基盤となるべき言語理論（記号論・意味論）を構造的な立場から整備しようとする「比喩表現論（上）（中）」（『大阪府立大学紀要』昭55・3）がある。また、比喩と換喩に関するヤコブソン理論（『言語の二つの面と失語症の二つのタイプ』）に立って換喩を考察した、倉田恵介氏「換喩と日本人のレトリック——理論と解釈をめぐって——」（札幌商科大学『論集』56）がある。作品別の研究になるが、半沢幹一氏「万葉比喩論序説——直喩の認定と表現形式——」（『共立女子大学文学部紀要』昭56・2）は、万葉集の直喩表現の指標となるもの六種の用例数を長歌・短歌別と巻別に調査したものの。また、山口仲美氏「文体論の新しい課題」（『国文学、解釈と鑑賞』昭56・5）は、源氏物語（和歌を除く）の直喩は、それ以前の文字言語や後宮における日常の口頭言語の影響を受けつつ、人工的によるものではないと説いている。ほかに、小学生の詩を対象にした、古岩井嘉蓉子氏「小学生の詩にみられる比喩表現について」（『文体論研究』昭55・11）、現代短歌に関する、安森敏隆氏「短歌の文体と比喩の構造——塚本邦雄・前登志夫・寺山修司を視軸として——」（梅光女学院大学『日本文学研究』15）などがある。

四、作品・作家別の文章・文体の研究

文章・文体の研究は、もともと隣接する領域にまたがるところが

少なくないが、そのことは作品・作家別の研究において著しく、特に文学研究者からの発言の方が多くくらいで、文章・文体の研究を名乗る論文を拾えば、題目を並べるだけでもかなりの紙数が必要。ここでは語学的処理を施したもの、および語学的な文章・文体の研究に示唆を与えるものを取上げようと思うが、題目だけですすすものも少なくないことをお断りする。以下ほぼ時代順に記す。

小林芳規氏「漢文の古訓点から見た古事記の訓読（上）（下）」（『文学』昭56・8、昭57・1）は、前編（上）は序文の訓み方（七四の字句の訓み方と対句の訓法）を、奈良末期・平安初期の訓法を部分的に伝存する、文選卷一九の訓点、知恩院藏大唐玄奘法師啓古点に基づいて定めたもので、後編（下）は古事記本文のうち、漢文的措辞としての助字（三二字）の訓み方、熟字（九語）の訓み方と、漢字句に対して読添えられるテニヲハ・形式語などの問題を同じく漢文の古訓点に基づいて定め、また論じている。恐らく『古事記』（岩波、日本思想大系）の訓注に伴う研究かと思うが、古事記の文章・文体の研究にとって基礎的な材料を提供するものとして注目される。古事記については、口承時代の語りの原型と筆録段階での個性的な表現意識との両面から考察した、戸谷高明氏「古事記表現論」（早稲田大学教育学部『学術研究』29）がある。

次に塚原鉄雄氏「諷誦文稿の史的座標——訓読史的意味と文章史的位置——」（『国語国文』昭55・9）は、東大寺諷誦文稿の構文原理を、正格漢文を母胎とし、正格漢文および漢文訓読の変形として定着したものと認定し、その文章様式の多様性は漢文訓読の文章様式が翻訳文体として定着する以前の各種の段階が混在したもので、それは定着以後も私的な表現行動（手控・覚書）にも存在し得たと推論する。

平安時代の仮名文学作品を対象としたものでは、塚原鉄雄氏「勢語章段の鎖型構成——伊勢物語の第十七段——」（『中古文学』昭55・4）

は、冒頭表現「むかし」を欠く伊勢物語第一七段は、第一六段の後半とみなすことができることに、第一八段から第二〇段までとは四者で章段連合を構成することができる、つまり章段の鎖型構成を適用したものと解している。糸井通浩氏「大和物語」の文章——その「なりけり」表現と歌語り——（『愛媛国文学研究』29）は、大和物語の「なりけり」表現を歌語りの背景となった状況に対する新しい認識や見方を表わすものと考え、さらに接続語「さて」「かくて」の歌語りとしての機能にふれている。大和物語では、吉田達氏「大和物語」一四七段の文体と方法（上）——絵圖と歌語りととの原初的交渉について——（『平安文学研究』64）、「同（中）——生田川処女伝承」題詠十首を考える——（同65）がある。このうち上編は、大和一四七段の第一段落にあたる「生田川伝承文」の表現パターンを検討し、この文章がもと絵圖を随伴し、文章は一種の絵解き台本であったのではないかという仮説を提示している。蜻蛉日記については、山口仲美氏「蜻蛉日記、こころとことば」（『国文学、解釈と教材の研究』昭56・1）、伊藤博氏「蜻蛉日記、自然とのであい」（同上）、大倉比呂志氏「蜻蛉日記中巻の表現構造——鳴滝籠りをめぐって——」（早稲田大学『国文学研究』70）などがある。

源氏物語に関しては二つの著書がある。清水好子氏著『源氏物語の文体と方法』（東大出版会、昭55・6）は、旧稿一四編（昭和24年〜51年）に若干の補訂を施し、未発表の論文一編（前述）を加えて、文体と表現方法に関するものと、絵圖とのかかわりについて考察したものとを二部構成にしたものである。また甲斐睦朗氏著『源

氏物語の文章と表現』（桜楓社、昭55・9）は、作品論・文体論・文法論・語彙論の中間領域にあって、いずれとも不即不離の関係にあるとする、氏の文章表現論の立場に立って、旧稿二一編に加筆し、整理、集成をしたものである。源氏物語に関する論文では、前項で扱った草子地をめぐるもののほかでは、源氏の原文とその現代語訳書五種および現代小説の若干を対象として、人物を表わす語句の出現度を調査した、進藤義治氏「源氏物語の文章の性質——現代語訳との比較について——」（南山大学『論集』4）がある。なお、国文学の表現論の立場からは、島内景二氏「源氏物語における表現とその基盤」（『国語と国文学』昭56・7）、小町舎昭彦氏「表現論から」（『国文学、解釈と鑑賞』）新しい研究領域はどこにあるか（昭55・5）などがある。

和泉式部日記については、稲葉真二氏に「『和泉式部日記』の表現主体——作品論の序章——」（駒沢大学大学院『論集』8）と「『和泉式部日記』の表現についての断章」（同9）があるが、前者は和歌と地の文とのつながりを類型化して示した上で、「△和歌▽とあり」という表現は、表現主体の立場が作中の△女▽に仕える侍女の立場として設定されたものだという仮説を提示したもので、後者は叙述の視点という角度から前論を補強しようとするものである。

説話文学では、今昔物語集について、「トナム語り伝ヘタルトヤ」が今昔の結語表現の基本型（全体の83%）であることを指摘した、安達雅夫氏「『今昔物語集』の結語「トナム語り伝ヘタルトヤ」についての考察」（東京学芸大学『中世文学論叢』3）、人物を表わす語句を漱石の「それから」と比較した、進藤義治氏「古典文章と近現代小説文章——人物を表わす語句と人物について述べる語句——」（南山大

学『論集』5)がある。また大木正義氏「沙石集における法語の文章——係助詞の使用状況を中心に——」(『解釈』昭56・8)は、沙石集の文章を説話文と法語文に分けて係助詞の使用状況を調べ、法語文にみられるコンの多用、ヤ・カ(疑問・反語)の使用などに教義を説く法語文の叙述態度を見ようとする。

中世では、稲田利徳氏「西行の和歌の表現(一)——「しがほ」をめぐって」(中四国中世文学研究会『中世文学研究』7)は、「しがほ」という表現をふくむ歌の数を書集と歌合について調査し、西行の場合の特色を指摘している。藤掛和美氏「お伽草子の類型表現——お伽草子文体論のために——」(『表現学論叢』)は、お伽草子の作品群に共通して見られる美人の形容をはじめとする紋切型の表現を扱っている。ほかに岡崎正氏「謡曲の文体——『求家』の詞と節を中心に——」(『駒沢短大国文』11)がある。

近世では、島田勇雄氏の好色一代男を扱った「『好色一代男』の俳諧的文章と一代型文章——谷脇理史氏の所論にふれて——」(『文学』昭55・9)、「『好色一代男』の修辞法三題——『甲南国文』昭55・3)が目につく。いずれも好色一代男がある編者によって長編小説風に編集されたものとする。氏の主張を文章論的考察によって補強しようとするものである。また、野田寿雄氏「西鶴文体の特徴——古典再評価の問題——」(『帯広大谷短大紀要』昭55・3)は、好色一代男の(冒頭文を分析してその俳諧的(連句的)文体である所以と西鶴の独創性によってきたるところを論じている。上田秋成については、中村博保氏「秋成の文章と文体」(『鑑賞日本の古典、秋成集』昭56・5)をはじめとする国文学研究の側からのものがある。

近・現代では四つの著書が目につく。進藤咲子氏著『明治時代語

の研究——語彙と文章——』(明治書院、昭56・11)の文章篇は、福沢諭吉の啓蒙的文章と新聞の文章を取上げている。旧稿七編(昭和34年~55年)に補訂を加えたもの。岡本勲氏『明治諸作家の文体——明治文語の研究——』(笠間書院、昭55・9)は、森鷗外を中心に北村透谷・尾崎紅葉・泉鏡花・矢野龍溪らの文章の性格を、助動詞と係結の実態をもとに考察し、さらに明治普通文の生成におよぶ研究で、既発表の論文一六編を中心にまとめたものである。次に、磯貝英夫氏著『文学論と文体論』(明治書院、昭55・11)は、氏の長年にわたる研究の集成であるが、文体に関する部分は、明治初頭の各種文体にはじまり現代の諸作家の文体に至る論で、文体展開史の体裁をなしている。また、相原和邦氏著『漱石文学——その表現と思想——』(塙書房、昭55・7)は、「明暗」と「道草」を対象として、そこに「矛盾叙法」と「対比叙法」と称する表現上の特色のみられることを指摘し、ともに事象をダイナミックに相対化してとらえようとする「相対把握」であるとす。漱石の文章表現に関する論をふくむ。

近・現代では概して文学研究者の手になる論文が多い。尾形国治氏「『浮雲』の表現」(『文芸と批評』昭55・12)は、作中人物の対称の漢字表記と作品世界との対応を扱ったもの。樋口一葉については、根岸正純氏「雅俗折衷体と樋口一葉『たけくらべ』」(『詩と評論、黙示論』4)の、「たけくらべ」に具現された雅俗折衷体の分析と解釈、前田愛氏「一葉の文体をめぐって——語りの構造——」(『国文学、解釈と教材の研究』昭55・12)の、「にぎりえ」最終章と「たけくらべ」書出し部分に見られる手法を論じたものがある。根岸氏には、田山花袋の描写論は作品の観点から補訂して読む必要があるとする立場から、その小説の文体を分析した「田山花袋の描写論と

小説文体——平面構構の周辺——」〔『表現学論叢』〕がある。鈴木二三雄氏「漱石文学初期の文体研究——助動詞『よだ』を中心に——」〔『島田勇雄先生とばの論文集』明治書院、昭56・11〕は、漱石初期の作品を対象に、直喩法に關係のある、助動詞「よだ」の用法を検討して、その適切な使用による、漱石の文章的確さを指摘している。このほか、岡崎晃一氏「『トロッコ』の表現論的研究——冒頭における修辭的方法——」〔『解釈』昭56・11〕、鶴谷憲三氏「太宰治の『単一表現』」〔『国語と国文学』昭56・2〕、下河部行輝氏「三島由紀夫の手法——追叙表現について——」〔『文休論研究』56・11〕などがある。

以上のほか、国語国文学關係の一般雜誌では、『国文学、解釈と教材の研究』が、「文体としての古典——伝統と創造」(昭55・3)、「明治の文体——新しい言語空間を求めて——」(昭55・8)を特集し、『国文学、解釈と鑑賞』が「文学表現総論」(昭55・8)を特集している。

結びに代えて

文法論的な文章研究が時枝誠記によって提唱されて以来すでに三〇年をこえるが、この分野ではこの兩年目立った新しい業績は見受けられない。抽象度の高い分野であるだけに全体的な理論化、体系化は困難なのであろうか。

文章・文体の通史的研究をせっかちに求める必要はないと思うが、類型的な文章・文体にしても、特定の作品・作家のそれにしても、歴史的所産であることはいくまでもない。したがってそれらの研究は本来的には歴史的研究の流れの中に位置づけられるはずである。そういう意味でこれらの研究の背後には文章史・文体史に対する研究者の理念、あるいは史眼ともいふべきものの存在が求められる

て当然である。そういう期待に答えてくれる研究もまたこの兩年決して多いとはいえなかった。

次に、文体論もそうであるが、表現論と称する分野は、隣接する研究領域にまたがる面が多く、もともと文章研究・文体研究との關係がはつきりしない上に、特に最近では国文学研究の一傾向に表現論を呼称する研究が見られて、それとも無縁ではなく、ますます正体がはつきりしなくなって来た感がある。

また、文体論や表現論において、語句や表現形式の統計的、計量的な調査を一方の極とするなら、その対極に、表現主体の発想や叙述のパターンを直感し、あるいは一語の中に作品の主題や表現主体の創作精神の凝縮を見出そうとするような論を置くことができると思うが、前者をかりに語学者的方法というなら、文章・文体の問題に語学者以上に多くの発言をしている文学研究者が、そういうやり方に馴染まないのは当然であって、いきおい論述が主観に陥りやすく、またその故に通達性を欠いたものも少なからず見受けられる。一方語学者側の調査の中には、数量の処理に腐心するあまり、単位の認定や意味・用法の分類などで国語学的分析に問題を残すものも見受けられる。

以上で蕪雑な展望記事を終る。粗笨の譏は免れがたいと思うが、それは、筆者の怠慢はさることながら、いくぶんは今日の国語国文学界の情報システムの貧しさに由るところもあることを弁解しておきたい。

文献の閲覧に便宜をはかって下さった国語研究所の日向茂男氏と名古屋大学文学部の安田徳子氏にお礼を申し上げます。